

# マヒンダ伝説考

山崎 元 一

はじめに

- 一、アシヨーカの王子・王女
- 二、史料の性格
- 三、マヒンダ伝説
- 四、伝説発達の方向(一)
- 五、伝説発達の方向(二)

はじめに

- 六、マヒンダの年齢
- 七、北方仏教徒に知られたマヒンダ
- 八、王弟マヒンダ
- 九、マヒンダ伝説支持の論拠
- 十、マヒンダ伝説の成立過程

セイロンの仏教徒は、自国の仏教がインドの聖王アシヨーカの王子マヒンダによつて、仏教発生地マガダから直接伝えられたものであることを誇つてゐる。そして、彼らの聖典語であるパーリ語は、ブツダが自ら用いていたマガダ地方の言葉であると主張している。一方、パーリ語の故郷を西インドに求める説も有力である。パーリ語西インド起源説を支持する学者は、セイロンの初期仏教が西インドを経由して伝来したものであると主張する。最近においても、前田恵学氏が「原始仏教聖典の成立史研究」と題する大著を発表し、マガダ——西インド——セイロン

という仏教伝播の方向との関連において、パリー仏典の成立過程を追求している。

パリー語西インド起源説に反対し、東インド（マガダ）起源説を奉ずる学者の主要な論拠は、アシヨカの王子マヒンダがマガダから直接仏教を伝えたというセイロン史書の記述である。西インド起源説の支持者でさえも、その多くはアシヨカの王子マヒンダの伝説を疑っていない。そして、マヒンダが少年時代西インドで育つたこと、マヒンダはセイロン布教の途次一ヶ月間（あるいは七ヶ月間）西インドに滞在したことなどを挙げて、自説の陥る矛盾を避けようとしている。しかし、マヒンダは出家・修業の地マガダの言語で約十年間聖典を学んだはずであり、また当時は聖典を暗誦によつて伝持したことや、マガダから四人の長老がマヒンダに同行したことなどを考慮すると、伝説を信ずる限り、マヒンダのもたらした聖典の言語はマガダ語ということになる。

従来の研究者は、マヒンダ伝説をあまりにも無批判に信じてきたのではなからうか。仏教のセイロン島への伝播は、決して一人の人物によつてごく限られた一時期に行われたものではなからう。かなり長期にわたるインド本土の仏教隆盛地との接触が考えられねばならない。こうした長期間の仏教移入の過程が、マヒンダという一人物に集中させられて、伝説は成立したのである。我々はマヒンダ伝説を批判的に分析して、そこに仏教伝播のいかなる面が語られているのかを明らかにする必要がある。なぜならば、仏教のセイロン島への伝播に関する諸問題を解決する鍵は、マヒンダ伝説自体の中に隠されていると思われるからである。

一、アシヨーカの王子・王女

アシヨーカに数人の王子があつたことは、自ら詔勅のなかで「天愛喜見王の諸王子 (putra……Devānāṃpriyasa Priyadasino rāno)」と述べていることから推察できる。また、アシヨーカによつて Ujjeni (Ujjayini)・Taxila (Takṣasīla)・Tosali・Suvārnagiri などの要地に派遣されてきた王子 (kumāra, arya Putra) のいたつたところ、詔勅中に記されている。しかし、これら諸王子のうち名前が判明するのはティーヴァラ (Tivāla) のみである。しかも、刻文からは、この王子が第二皇后 (dātiyā devī) カールヴァーカー (Kāluvākā) の子であること以外には何も知る事ができない。

伝説によつて知られる王子・王女を列挙してみると次のようになる。

(1) マヒンダ (Mahinda)・サンガミッター (Saṅghamittā)——マヒンダはセイロンの開教者、サンガミッターはセイロン比丘尼教団の祖。

(2) クナーラ (Kunāla)——北方仏教徒の間に広く知られる王子。特に西北インドで崇敬された。

(3) クスタナ (Kustana)——西域の都市コータン (于闐) の建国者。

(4) ジャラウカ (Jalauka)——カシミールの王。シヴァ教の信者であつたが、のちに仏教も保護した。

(5) チャールマティー (Chārumatī)——ネパールの王族と結婚したアシヨーカの王女。ネパールの大寺院の建設者。

(6) 扶邦・宏徳・至徳——南詔の建国説話に登場するアショーカの王子。至徳は南詔王家の蒙氏の祖。<sup>(8)</sup>

以上の六組の王子・王女伝説を個々に検討してみると、これらの伝説がインドの周辺で仏教の栄えた地方に伝わること、また六組の王子・王女はそれぞれ異つた地方の異つた伝説に登場し相互に何ら関係のないことがわかる。アショーカの王子・王女伝説にみられるこのような傾向は、インド周辺の仏教隆盛地において、仏教発生地<sup>(9)</sup>の聖王アショーカと自国あるいは自国の教団とを直接関係づける目的から、王子・王女の伝説が創作されたことを意味しているのである。これら諸王子・王女のうち、クナーラのみはヒンドゥー教やジャイナ教の文献にも見出され、また美眼を失う悲劇によつて広く北方仏教徒に知られていたが、クナーラ伝説自体、西北インドの伝説作者によつて改変され、西北インドの繁栄を誇る手段として利用されているのである。<sup>(9)</sup> 従来ほとんどの学者によつて史実とみなされてきたマヒンダ・サンガミッターの伝説も、こうしたアショーカの王子・王女伝説の一環とみる事ができるのではなからうか。<sup>(10)</sup>

## 二、史料の性格

マヒンダ伝説研究上の主要な史料は、仏教の起源から西暦三〜四世紀のセイロン王 Mahāsena の時代までを編年史的に述べたパーリ語の叙事詩「島史 (Dīpavaṃsa)」<sup>(11)</sup>と「大史 (Mahāvamsa)」<sup>(12)</sup>である。

「島史」(I〜XXIII)は四世紀ごろ<sup>(13)</sup>あるいは五世紀はじめにかけて(編纂された史詩であるが、編者の名は伝えられていない<sup>(13)</sup>)。この書はセイロン仏教史をパーリ語で叙述しようとした最初の試みであるためか整つた構成をもた

ず、文法的にも拙く、重複や飛躍が随所にみられる。また教系統の年代がそのまま併用されてさえる<sup>(14)</sup>。しかし、これらの点がかえつて原史料に近いことを立証するとも考えられ、整然とした「大史」よりも史料的な価値が高いといえる<sup>(15)</sup>。「島史」の編者は古都 Anuradhapura の Mahavihara (大精舎) に伝えられた仏典の註釈書 (Aṭṭha-katha) の歴史篇によつて本書を完成したらしい<sup>(16)</sup>。この註釈書は古シンハリ語の散文で書かれ、パーリ語の韻文がまじつたものと考えられるが、今日では見ることができない。

「大史」(I~XXXVII<sup>50</sup>)の編者はその序文で、「古(聖)によつて編まれたかの(大史)」の欠陥を補つて史詩を再編纂したものであると述べている(I.1)。「古聖の大史」が「島史」を指すのか否かは明らかではないが、<sup>(17)</sup>「大史」には「島史」にみられた拙さはなく、完成した文学作品となつてゐる。「大史」は「島史」より約一世紀遅れた五世紀(あるいは六世紀はじめにかけて)の作品で、Dhatusena 王(c. 453~471)の叔父 Mahanāma 比丘が王名によつて編纂したものと伝えられている<sup>(18)</sup>。「大史」は「島史」とほぼ同一の事項を扱つてゐるが、「島史」の記事の増補や新しい物語の付加がしばしばみられる。これによつて「大史」の編者は、「島史」を参照しつつ、「島史」の扱つた Mahavihara の註釈書やその他の新しい資料を用いて同書を完成したことがわかる<sup>(19)</sup>。

なお、Buddhaghosa (仏音、覚音)によつて書かれたパーリ律蔵の註釈書「Samantapāsādikā」の序文にも、仏滅直後よりマヒンダの入寂に至るセイロン仏教史が述べられている<sup>(20)</sup>。本書が書かれたのは五世紀中頃であり、「島史」と「大史」の中間の時代に属する。序文の目的がパーリ律蔵に權威を与えることにあるため、両史詩に比べてセイロンの政治史に関する記事は少ない。しかし、仏教関係の記事についていえば、その内容は前二書とほとんど

変らない。「島史」に主として拠りながらも、「島史」の原資料である註釈を参照してこの序文を完成したのである。<sup>(21)</sup>「Samantapasadika」は序文とともに、南齊の永明七年(四八九)に僧伽跋陀羅によつて「善見律毘婆沙」として漢訳されている。<sup>(22)</sup>

以上の三書は、仏教徒によつて伝えられた最古の編年史的な作品であり、仏教史研究の貴重な史料とされてきた。しかし、三書の記事のうちでも編纂年代に近いものは、ほぼ史実とみてよからうが、本稿に関係するアシヨーカーの時代の前後についていうならば、これらの書物にそのまま拠つて歴史を記述することはきわめて危険である。かつて宇井伯寿博士は仏滅年代を論じた際に、おおよそ次のように述べている。<sup>(23)</sup>

セイロンの史書は、上座部 (Theravāda) 中の分別説部 (Vibhajjavāda) に属する大精舎 (Mahāvihāra) 所伝のものにすぎず、彼らが自己の宗派が真の仏説を維持していることを主張するためのものである。最古の「島史」を記したパーリ語は、アシヨーカー王時代のマガダ本土の言語そのままではなく、後世セイロンで種々に整えられたものであるし、また仏教伝来当時の伝説が「島史」の書かれた西暦四〇〇年頃まで何の変化も被らずに残つていたとは考えられない。

われわれはセイロンの史詩を史料として扱う際に、宇井博士のこの指摘をつねに念頭に置かねばならない。

### 三、マヒンダ伝説

セイロンとガンジス流域の国家との間に直接交渉が行われたことを確実に知ることができるのは、アシヨーカー王

の時代からである。<sup>(24)</sup> マウリヤ朝治下のインドとセイロン島との間には、民間人の往来も活潑に行われたであろう。仏教をはじめとするインド文化は、この時代にかんがりの勢いでセイロンに流入したと考えられる。アショーカ王刻文の文字と酷似した書体で刻まれた仏教関係の刻文がセイロンで発見され、<sup>(25)</sup> またブッダガヤーの欄楯(前二世紀)にセイロン人の記録がみられる。<sup>(26)</sup> こうしたことから、マウリヤ朝の前後にセイロンに仏教が伝わっていたことは明らかである。<sup>(27)</sup>

一方、セイロン仏教徒の伝える史書では、アショーカと同時代のセイロン王として Devānampiya-tissa の名を挙げ、両王の時代にマウリヤ王家とセイロン王家との直接の交渉がはじまり、引続き王子マヒンダによつて正式に仏教が伝えられたと説明している。いま最古の史書「島史」(VI~VIII, XII~XVIII)に従つてその内容を要約すれば次のようになる。<sup>(28)</sup>

アショーカは王子時代に父から西インドの Avanti 国の統治を任されたが、同国の都 Ujjain へ赴く途中 Vedisa でその地の長者の娘デーヴイーを得て、彼女との間に男児マヒンダと女兒サンガミッターをもうけた。父王が病に倒れると、アショーカは兄弟と王位を争つて勝ち、四年後に即位灌頂式を挙げ、即位第三年に仏教に改宗した。アショーカの師であり仏教教団の長でもあつた Moggaliputta-tissa の助言を聞き入れて、アショーカはマヒンダとサンガミッターの出家を許した。マヒンダの和尚 (upajhāya) は Moggaliputta-tissa であり、また、マヒンダを出家せしめたのは、のちに南インド方面の布教に尽くした Mahadeva、マヒンダの羯磨戒師をつとめたのは、のちに西北インドの開教者となつた Majjhantika であつた。

アシヨーカーの仏教教団に対する布施が頻繁に行われるようになると、教団内に利を求めて異教徒が流入し、教団の統一が乱された。教団の内紛は、アシヨーカーの干渉とその後開かれた第三回の仏典結集によつて終止符が打たれた。第三結集の主筆者 Moggaliputta-tissa は、正法を四周の国々に伝えるために Majjhantika, Mahadeva をはじめとする伝道師を諸方に派遣した。このときマヒンダは他の四人の長老を率いてセイロンの布教を行うよう命ぜられた。五人は道具・式事を行うに最小限の人数である。ここにセイロン仏教教団が正式に成立することになる。

マヒンダの一行には沙弥スマナ (Sumana) が加わつた。マヒンダはまず母の住む Vedisa に向い、母に教えを説き、この地の僧院に一ヶ月滞在した<sup>(26)</sup>。一行は Jettha 月の布薩の日に空中に昇り、セイロンの Missaka 山頂に降下した。その際 Vedisa から新たに優婆塞のバンドッカ (Bhadduka) が同行した。

セイロン王 Devānampiya-tissa は、その日狩猟のために Missaka 山に来ていた。王は未だ見ぬ友アシヨーカーの教示によつて、一ヶ月前に第二回目の灌頂式を挙げたばかりであつた。その時得た知識のおかげで、セイロン王はこの一行が仏弟子たちであることを知つた。マヒンダの説教を聞き、王をはじめ数多くの男女が仏教に帰依した。王はマヒンダに Mahameghavana (大雲林、別名テイスサー園 Tīssarāma) を寄進した。これがセイロン最初の僧院 Mahāvihāra (大精舎) の起源である。

王はさらに雨安居のための僧院や、アシヨーカーの許から取り寄せた仏骨を安置するための塔など、数々の建造物を教団に寄進した。またマヒンダに勧められたセイロン王は、甥の Arifha をアシヨーカーの許に遣わし、



ブツダガヤーの大菩提樹の南枝と長老尼サンガミッターとをセイロンに招来した。サンガミッターは多数の女性を出家させ、セイロンにおける比丘尼教団の祖となつた。

数々の堂塔を建立し、仏教の保護に力を尽した Devanampiya-tissa は、四十四年間の統治のち没した。王には子がなかつたので Utiya と呼ばれる弟が位を継いだ。マヒンダはこの Utiya 王の第八年に八十歳（法臘六十歳）で没した。マヒンダの遺骨は Mahavihara に安置され、そこに塔が建てられた。サンガミッターも翌年七十九歳で没した。Utiya 王は長老尼のために塔を建てた。

マヒンダ伝説から誇張や粉飾を除去した後に残る核心、つまりアショーカの王子マヒンダによつてセイロンが開教されたという事件は、従来ほとんどそのまま史実とみなされてきた。しかし、われわれは、今日知られる最古のマヒンダ伝説が、こうした事件から六〇〇年余りも後代の作品であることや、その間伝説自体も多くの改変を被つたであろうことを思い起す必要がある。

#### 四、伝説発達の方向（一）

セイロンで発見された最古の刻文はブラフミー文字で記されており、この文字はアショーカ王刻文の文字と酷似しそれと同じ発達段階にある。また、セイロンにおける文字の発達は、形態の上からみても発達の度合からみても、西暦二世紀末に至るまでインドの文字、特に西インド・南インドの文字の発達と近似している<sup>(30)</sup>。更に、セイロ

ンに伝わる仏典を記したパーリ語は、純粹に言語学的な立場からみた場合、西インドからもたらされた（あるいは少くとも西インドの要素を多分に加えている）という説が有力である。<sup>(31)</sup> これらのことは、西インドの仏教とセイロン仏教との密接な結びつきを語っている。

西インドに仏教が伝わった年代は、正確にはわからない。仏典では、ブツダの生存時代に Ujjeni 生れの Malakaccāna（大迦旃那）や Supparaka 生れの Punna（富留那）などが西インドで活躍したことを伝えている。<sup>(32)</sup> 特に前者はブツダの弟子中「分別するものの第一」と称され、セイロン上座部（分別説部）の派祖の一人に数えられる人物である。<sup>(33)</sup> 二人の他にも、西インド出身者とされるブツダの直弟子は多い。これらの人物にまつわる伝説をそのまま認めることには異論があろうが、ブツダの生存時代に「少くともこの地で伝道活動が行われていた」という<sup>(34)</sup> 推測は可能であらう。

仏滅後百年（百十年）の所謂第二結集は、異つた部派の古伝承がほぼ一致することによつて史実とみてよからう。この第二結集では西インドの比丘達の活躍が特に目立っている。<sup>(35)</sup> アショーカの即位を仏滅後二百年代とするか百年代とするかで仏教史は大きく変つてくるが、何れにせよアショーカの時代は第二結集とほぼ同時代かそれ以後であり、第二結集の伝説によつても、アショーカの時代に西インドに仏教が確立していたことを知り得る。またアショーカ王の仏教関係の碑文の分布からみて、当時の仏教の中心が西方に存在したことを推測でき、<sup>(36)</sup> サーンチー小石柱詔勅の内容から、王の時代に、サーンチー地方に既に確立していた仏教が分裂の危機にあつたことが知られる。マウリヤ朝とそれに続く時代のサーンチーの塔の猷納者銘には Ujjeni 居住者の名が圧倒的に多く、この地の仏教が

Ujjeni と密接な関係にあつたことがわかる。<sup>(37)</sup> マウリヤ朝の前後数世紀における西インドの仏教の中心地を Ujjeni に求める説は十分根拠のあるものと言えよう。<sup>(38)</sup>

アシヨールカ王の死後マウリヤ帝国は急速に崩壊した。しかし、マウリヤ帝国崩壊後も、セイロンの教徒はインド本土の仏教の隆盛地と接触を保ちながら、自国の仏教を発達させたものと考えられる。文字や言語の上からは、セイロンと結びつきのあつたインド本土の仏教隆盛地を、Ujjeni を中心とする西インドに求めるのが妥当と思われるのであるが、伝説の上からはどうであろうか。

マヒンダ伝説を読んでまず気付くことは、同伝説と Ujjeni, Vedisa<sup>(39)</sup> との関係が密接なことである。マヒンダとサンガミッターは、アシヨールカが西インドの太守をしていたころ Vedisa の長者の娘との間にもうけた子であり、またマヒンダはセイロン伝道の途次母の住む Vedisa にしばし滞在し、ここから直接セイロンに渡つてゐる。その際、この地のバンドゥカが仏教に帰依し、優婆塞として一行に参加している。要するに、セイロンにおける比丘教団・比丘尼教団・在家信者の祖となつた人物は、何れも西インド出身者なのである。私はマヒンダ伝説のこのような傾向は、仏教が主として西インドから伝わつたことを意味するものであると考える。

セイロンの史書によると、アシヨールカは王子時代に西インド Avanti 国(首都 Ujjeni)の太守であつたといふ。<sup>(40)</sup> しかし、「阿育王伝」をはじめとする有部系の北方伝承によると、アシヨールカは王子時代に反乱鎮圧のため Taxila と Khasa<sup>(41)</sup> に派遣させられており、チベット人ターラナータの「インド仏教史」では Nepal と Khasya (Khasa) に派遣させられている。<sup>(42)</sup> アシヨールカ王碑文から、王は自己の在世中に Taxila や Ujjeni などに王子を派遣して統

治させていたことがわかる。<sup>(43)</sup>アショーカの父ビンドゥサラーの時代も同様と考えられるから、アショーカが即位前に Ujjeni, Taxila などに派遣させられた可能性はある。しかし、伝説によつて派遣地が異なる点を注意せねばならない。Mathura, Taxila 方面で栄えた有部系の伝承は Taxila と Khasa、チベット伝承は隣国の Nepal と Khasa とをそれぞれ派遣地としているのである。王子時代の伝説のこうした傾向からみて、セイロン史書が Ujjeni を派遣地とするのは、セイロンのアショーカ王伝説が西インドから伝わつたことを意味するものと考えてよからう。<sup>(44)</sup>このようにみてみると、西インドが未来の転輪聖王によつて統治されていたという伝説の史実性も、多少疑わしくなってくる。西インドの人々によつて、自国を讃えるために創作された伝説とも考えられるからである。

一方セイロンの史書は、西インドを無視して、マガダの仏教との結びつきのみでセイロン仏教の成立・発展を説明しようとする。すなわち、マヒンダがマガダの都 Pataliputta で出家し、マガダの僧団の長老となり、その地の仏教を直接セイロンに伝えたことを強調しているのである。その後のセイロン仏教の歴史に関しても、セイロン史書は西インドの仏教を完全に無視している。ここに、セイロン仏教の正統性をマガダの仏教と直接結びつけることによつて主張しようとした同島の仏僧たちの意図を読みとることができる。

セイロン仏教徒が西インドとの関係を東インドとの関係に置きかえようとしたことは、「島史」と「大史」という新旧両史書に載せられたセイロンの建国伝説を比較することによつても立証される。本稿に直接関係しないため、建国伝説をここに紹介することは省くが、「島史」(IX) <sup>(45)</sup> Lala-Suppāraka-Bhārukaccha としう西インド沿岸地方が物語の舞台であり、わずかに建国者ヴィジャヤ (Vijaya) の祖母を Vanga の王女とするにすぎない。

この Vanga<sup>(49)</sup> を通説に従つてベンガルと考へても、物語の主要な舞台が西インドにあり、ヴィジャヤが西インドの海岸沿いにセイロンに來航した点は變らぬ。これに対し、「大史」(VI~VIII)では舞台を Vanga (Bengal)-Kalinga-Magadha という東インドに移し、Lala までが東インドに存在する國となつてゐる。<sup>(49)</sup>しかし、同書では Lala からセイロンへ向う船が「島史」と同様に西インドの港 Supparaka に寄港しており、<sup>(50)</sup>地理的に不自然なものとなつてゐる。「島史」中の物語は伝説の古形を示し、『大史』の物語は後世のもので、ヴィジャヤの物語を仏教發生地と結びつける意図を示してゐる。<sup>(51)</sup>という W. Geiger の伝説批判は正しいと思ふ。ヴィジャヤ伝説は、セイロン來住のアーリヤ人の原住地や、アーリヤ系のシンハリ語の起源の問題と直接關係するために、学界の重要問題としてこれまで多くの學者によつて研究されてきた。しかし、ヴィジャヤ伝説を扱う際には、後世の付加改變のみられる「大史」よりも「島史」によるべきであらう。そして「島史」は、この伝説が西インドとセイロンの關係を語るものであることをはつきり示している。西インド沿岸經由の航路は東インド沿岸經由の場合と比べて安全度が高い。<sup>(52)</sup>紀元後二世紀ころまで、インドとセイロンとの交渉は、東インド經由よりもむしろ西インド經由で活潑に行われていたことが言われている。<sup>(53)</sup>

## 五、伝説發達の方向 (二)

セイロン仏教徒の伝承には、自國の王家や仏教史上の重要人物に高貴な血(シャカ族とかマウリヤ王家)が流れてゐることを強調する傾向が認められる。成立年代の異なる諸作品を比較するならば、マヒンダ伝説もまたこうした

方向をとつて發達してきたことが知られる。本節では、「島史」、「大史」、「Mahāvamsa Tīkā (Vamsathappakasmī)」(七〜九世紀頃成立)、「Mahābodhivamsa」(十〜十一世紀頃成立)という四作品にみられるマヒンダ伝説を、出生の問題に視点を置いて検討してみようと思う。W. Geiger は、これらの作品の原典は「島史」の編纂以前から存在した古シンハリ語の散文で書かれた註釈書 (Aṭṭhakathā) であると言<sup>56)</sup>う。しかし註釈書自体決して固定したものではなく、時代とともに新しい内容を加えたはずであり、成立年代の異つたこれら四作品の比較対照は伝説の發達を知る上の不可欠な操作であらう。

(一) 「大史」(VIII〜X) には、セイロン王家とブツダの出たシヤカ族との関係が次のように記されている。シヤカ族の王家の一支族は、ブツダの父淨飯王 (Suddhodana) の弟 Amitodanasakka の子 Paṇḍusakka に率いられて、シヤカ族滅亡の直前にガンジス対岸の地に移住して王国を建設した。セイロン第二代の王 Paṇḍuvāsudeva は、このシヤカ王の末娘 Bhaddakaccāna を妃とした。王妃の兄弟であるシヤカ族の王子たちも来島して、島の各所に町邑を建設して住みついた。セイロン第四代の王 Paṇḍukābhaya の祖父はこのとき来島した六人の王子のうち一人 Dighāyu であり、母方の祖母は Bhaddakaccāna である。

「島史」(X, XI, e.) の記事は「大史」ほど完全ではないが、その内容は「大史」とほぼ一致する。ここに記された Paṇḍukābhaya の孫が Devānampiya-tissa であるか<sup>57)</sup>、「島史」の編者は仏教伝来当時のセイロン王がシヤカ族の血を引いていることを認めていたわけである。このようにして、セイロン王はインドの聖王アショーカと対等な地位に立ち得た。後代のセイロン王のなかに、Paṇḍukābhaya の子孫と称し、シヤカ族の血を誇つた王のいたこ

とが刻文から知られる。<sup>(57)</sup>

(二) 「島史」によると、マヒンダに同行してセイロンに渡つた沙弥スマナは、サンガミッターの「姉妹の子 (bhāgineyya)」と考へられていたらしい (XV<sup>52</sup>)。従つて「島史」の成立した時代には、セイロンにおける比丘・比丘尼・沙弥の祖が全てアシューカの一旗であるという伝説が確立していたことになる。「大史」では「サンガミッターの子沙弥スマナ (Saṅghamittāya atraja Sumana sāmānera)」(XIII<sup>4</sup>)とされているのみならず、マヒンダに伴つて西インドから来島した優婆塞のナンダッカまでが「マヒンダの母デーヴィーの姪の子 (Devīya bhāgīnidhītu puto)」(XIII<sup>16</sup>)とされている。「大史」において、セイロン仏教団がアシューカの一旗によつて樹立されたという主張は、さらに強く打ち出されているのである。<sup>(58)</sup>

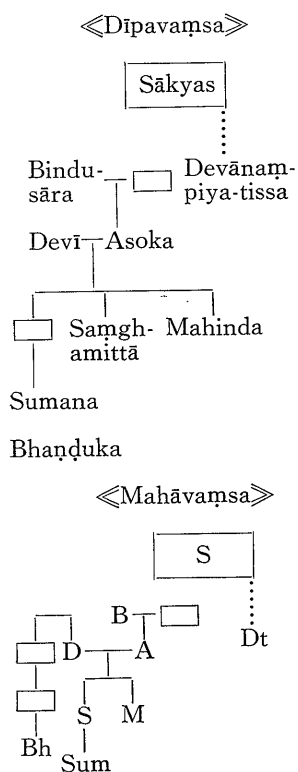
(三) 「Mahāvamsa-Tika」は、マウリヤ朝の始祖チャンドラグプタに関するほぼ次のような伝説を載せている。一団のシヤカ族がコーサラ王 Vidudabha による虐殺を逃れてヒマラヤ地方に移り、そこに美しい町 Moriyānagara を建設した。ここに住んだシヤカ族はマウリヤ族 (Moriya) として知られるようになった。この町の首長の娘は新しく生れた子を捨てた。赤子は Canda という牡牛によつて育てられたため Candagutta と呼ばれた。バラモン (Brahmin) の Cānaka はこの少年を見出し、将来を見込んで教育した。のちに Cānaka がナンダ朝を倒したとき Candagutta は彼によつて王位につけられた。<sup>(59)</sup>

この伝説によれば、チャンドラグプタの孫のアシューカはシヤカ族の血を引いており、従つてマヒンダは父方からシヤカ族の血を受けたことになる。また同書によると、ビンドゥサーラの第一妃でアシューカの母となつた

Dhammā もマウリヤ族の出身であるという。<sup>(60)</sup> それ故アショーカは母方からもシャカ族の血を引いたことになり、マヒンダが父から受けた血の高貴さは一層増しているのである。このような物語は「島史」や「大史」には全く語られていない。言うまでもなく、セイロン起源以外の文献にも同様な記事は見当らない。従つて、この種の伝説は五世紀より九世紀に至る時代にセイロンで新たに生れたものと考えてよからう。

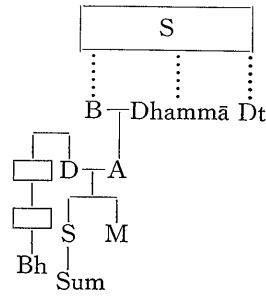
(四) 「Mahābodhiyaṃsa」によると、マヒンダの母となつた Vedisa の長者の娘デーヴィーは、Vedisamahadevi と呼ばれ、シャカ族を滅ぼそうと企てたコーサラ王 Viḍūḍabha の攻撃を逃れて Vedisa 地方に移つたシャカ族の一支族の娘 (Sakya-kumari) とされている。<sup>(61)</sup> この結果、マヒンダとサンガミッター、サンガミッターの子スマナ、デーヴィーの姪の子バンドウカが全てシャカ族の血を引いていることになつた。われわれはここにマヒンダ伝説発達の最後の段階をみるることができる。

右に述べたマヒンダアショーカ伝説の発達段階を图示すれば次のようになる。

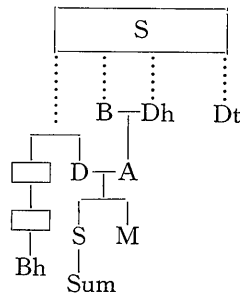




《Mahāvamsa Ṭīkā》



《Mahābodhivamsa》



以上の四書の比較により、セイロン仏教史上の重要な人物の出自が伝説作者の意のままに改変され、それがのちの時代に継承されていつた過程が明らかになつた。最古の段階を示す「島史」において、ブッダの三度にわたるセイロン来島の物語（I~III）や、セイロン王家にシャカ族の血が流れていることを証すための物語が強調されている点を考慮すれば、「島史」に記されているマヒンダ伝説は既に一定の方向に発達したものである、と考えることが可能であろう。すなわち、インドの聖王アショーカとセイロンの開教者マヒンダとの父子関係が、セイロンの伝説作者の創作になるのではなからうかという推測である。続く節でこの問題を他の面から検討してみようと思う。

六、マヒンダの年齢

オランダの学者 P. H. L. Eggermont は、「島史」の第四~第八章を分析して、そこに五人の作者による三系統の異つた年代系列が用いられていることを明らかにした。<sup>(2)</sup> その第一の系列 (Upasampada-list I) によると、マヒン

ダは仏滅後二〇四年に生れ、十歳（仏滅後二二四年）のとき父がインドの支配権を獲得し、二十歳（仏滅後二二四年）のとき父の許しを得て出家具足戒を受け、四十歳（仏滅後二四四年、受具後二十年）のとき師の Moggaliputta-tissa が没したため師に代つて教団の長の地位についている。この第一の年代系列は「Samantapāsādikā」や「大史」によつて継承された。第二の年代系列（Ācariyaparampara-list）では、アショーカの王位継承を仏滅後二二七年の事件とし、マヒンダの出家はそれから十年後の仏滅後二二七年、セイロン布教を仏滅後二二七年（受具後十年）、マヒンダが師の後継者となつた年を仏滅後二四七年（受具後二十年）としている。第三の年代系列（Upass-list II）によると、マヒンダは仏滅後二二五年に出家し、二四五年（受具後二十年）で師の後継者となつてゐる。

仏教教団では二十歳未満の男子出家者を沙弥（samāghera）と称し、一人前の比丘としない。二十歳になり、はじめて具足戒を受け比丘となる。教団においては受具後の年数で席次が決まり、十年で中位の僧、二十年で上位の僧とされる。<sup>(63)</sup> また受具後十年に至らない比丘が他人に具足戒を授けることは禁じられていた。<sup>(64)</sup> 「律藏」中に見られるこうした規定と照し合せてみると、マヒンダの年齢面における作爲は明瞭である。Eggemont の年代論には、なお検討を加えねばならない問題が多いとはいへ、マヒンダの生涯の重大事件が十年単位に置かれていゝという点の指摘は、十分注目するに値しよう。

同じことはセイロン比丘尼教団の祖サンガミッターについても言えるのではなからうか。沙弥尼（samāgheri 二十歳未満の女性の出家者）は十八歳より二年間にわたり六法（殺生・不与取・非禁行・妄語・飲酒・非時食）に対する禁戒（sikkhamaṇa）と呼ぶ。式又摩那（sikkhamaṇa）と呼ぶ。式又摩那は満二十歳に達

すると僧伽の許可を得て具足戒を授けられ比丘尼となる。既に嫁したことがある女性は、満十二歳に達し更に二年間六法戒を修めていれば具足戒を受けることが許されていた。満二十歳に達した女性といえども、二年間六法戒を維持したあとでなければ具足戒を受けることは許されなかつた。また何れの比丘尼にも、受具後十二年未満のときは他人に具足戒を授けることが禁じられていた。<sup>(66)</sup>

「大史」や「Samantapāsādikā」によつて継承された年代系列は Eggermont の第一の系列であるが、そこに示されているサンガミッターの年齢はこうした比丘尼教団の諸規定に即して決定されたものと思われる。すなわち、サンガミッターは十八歳で出家して式叉摩那となり、二十歳のとき具足戒を授けられ、三十歳（受具後十年）でセイロン島に渡り王族の Anula をはじめとする数々の女性を出家させ、三十二歳（受具後十二年）で出家した女性（出家後二年）に具足戒を授けたのである。サンガミッターは既婚の女性であるから満十二歳で具足戒を受ける資格はあつたのであるが、兄とされるマヒンダとの関係から、あるいはサンガミッターに權威を与えるため（来島したのが受具後十年、年齢三十歳となる）右の経歴が考えだされたのであろう。

なお、マヒンダが彼の大保護者であつた Devanampiya-tissa の後継者 Utiya 王の第八年に八十歳（法臘六十歳）で没したという伝説の記事は<sup>(66)</sup>、ブッダが彼の最大の保護者ビンピサーラ王の後継者アジャータシャトル王の治世第八年に八十歳で没したという伝説を模したものと考えることも可能である。

以上の考察から、マヒンダ・サンガミッターの生涯は、機械的に年齢を定めた上で伝説中に挿入されたものであると考えてもよいのではなからうか。少くとも、セイロンの史書に両者の年齢が詳しく述べられているからといつ

て、それが伝説の史実性を証するものでないことは明らかである。

### 七、北方仏教徒に知られたマヒンダ

北方仏教徒もセイロンの開教者マヒンダについて、ある程度の知識をもつていた。しかし、玄奘の「大唐西域記」と、南伝經典の漢訳である「善見律毘婆沙」とを除けば、マヒンダとアシヨカとの関係を伝える文献は見出すことができない<sup>(67)</sup>。マヒンダの名を伝える北方仏典の内容は次のようなものである。

#### (一) 「Mahakarmavibhanga」

ブッダの直弟子 Mahakāśyapa, Gvāmpati, Pindola-Bhāradvāja, Pūra 等や、カシミールの開教者 Madhya-ndina (Majjhantika) と並んでマヒンダの名が現われる。しかし、辺境地の開教者としての名誉が与えられているだけであり、マヒンダの生れ、生存時代などは何も記されていない<sup>(68)</sup>。

#### (二) 「分別功德論」

ブッダの直弟子アーナンダの涅槃の場面にマヒンダが登場する。

(阿難) 時度弟子。一名摩禪提 (Majjhantika)。二名摩呻提 (Mahinda)。告摩禪提。汝至罽賓 (Kashmir)

興顯仏法。彼土未有仏法。好令流布。告摩呻提曰。汝至師子渚国 (Ceylon) 興隆仏法。<sup>(69)</sup> (卷第二)

阿難臨般涅槃時。度二弟子。一名摩禪提。二名摩呻提利。摩呻提利者地王也。若不作道人者。当王此閻浮提及三天下。故名摩呻提利。阿難教此弟子。汝至師子渚国。興顯仏法。彼国人与羅刹通。要須文字然後交接。市易

六十種書。書中有鬼書。名阿浮。人書音阿羅。摩呻承教。至彼顯揚仏法。自是教迹今日現存。(70) (卷第五)

アーナンダの涅槃をめぐる物語は北方仏典中にしばしば見出されるが、その場面にマヒンダが登場するのは「分別功德論」のみである。アーナンダの涅槃はアジャータシャトル治世中の事件であり、これはアショーカ王より約一世紀(南伝によると約二世紀)古い時代である。アーナンダにセイロンへの布教僧派遣の名譽を与えるため、マヒンダの生存年代を繰り上げたと考えることはできる。しかし、マヒンダをアショーカの王子とする伝承が北方仏教徒の間に認められていたとするならば、このような改作は行い得なかつたに相違ない。「分別功德論」は後漢代、あるいはおそくとも四世紀には漢訳されていたのであるから、原典の成立はそれ以前になる。従つて、「島史」と同じ時代か、あるいはそれより一世紀以上成立の早い「分別功德論」の編者は、アショーカとマヒンダの父子關係を認めていなかつたことになる。なお、チベットの伝承はマヒンダのセイロン布教を知らず、同島の開教者をアショーカ王時代の聖者カーラ(マガダ東方アンガ国の富商の子)としている。(71)

北方に知られたマヒンダ伝説のうちで特に重要なものは「大唐西域記」所載の伝説であるが、これについては節を改めて論じようと思う。

## 八、王弟マヒンダ

「大唐西域記」には、アショーカの同母弟マヒンダに関する次の物語が記されている。

### (一)摩揭陀国王(卷第八)

マヒンダ伝説考 山崎

〔要約〕 故宮の北にある大石室は無憂王 (Asoka) が同母弟摩醯因陀羅 (Mahendra) のために建てたものである。摩醯因陀羅は王弟の身でありながら王を気取り、また横暴であつたため衆庶の怨みを買つた。老臣の諫言に従い、王は泣く泣く弟の処罰を決定した。七日の猶予を与えられ幽室に置かれた弟は、努力の結果、悟道に達し得た。無憂王は弟のために神鬼を使役して大石室を造り、弟を都の近くに住まわせた。

(二) 秣羅矩吒国 (卷第十)

城東不遠有故伽藍。庭宇荒蕪基趾尚在。無憂王弟大帝 (Mahendra) 之所建也。其東有罽堵波。崇基已覆鉢猶存。無憂王之所建立。在昔如来於此說法。現大神通度無量衆。用彰聖迹故此標建。歲並弥神。所願或遂。

(三) 僧伽羅国 (卷第十一)

僧伽羅国 (Ceylon) 先時唯宗淫祀。仏去世後第一百年。無憂王弟摩醯因陀羅。捨離欲愛志求聖果。得六神通具八解脫。足歩虚空來遊此国。弘宣正法流布遺教。自茲已降風俗淳信。

(一) アシヨーカ王弟の出家得道の伝説は、アシヨーカによる王弟教化の物語として、南北両仏教徒の間に広く知られたものである。王弟の名は、北方では Virasoka, Sudatta, Sugātra などとされ<sup>(74)</sup>、南方では単に Tissa と呼ばれて<sup>(75)</sup>いる。王弟の名はこのように多様であるが、南北両伝承におけるアシヨーカによる王弟教化のテーマはほとんど同じと言つてもよく、両伝承が同一人物を指したものであることは明らかである<sup>(76)</sup>。この伝説は北方では遅くとも三世紀には成立していた。最初に漢訳されたのは後漢代の訳出と伝えられる「分別功德論」所収のものである。本

經典の訳出を四世紀まで下げたとしても、三〇六年には「阿育王伝」が漢訳され、その後も同伝説を収めた經典が次々に漢訳されているのであるから、玄奘の時代より三〇〇年以前から「王弟」の物語は中國の仏僧に親しまれていたことになる。

次に南伝とはいえば、王弟ティッサの現われるのは「善見律毘婆沙」「大史」以後の文献であり、「島史」にはティッサの名は見当らない。しかし、「島史」第七章の「*ṭṭi vassamhi Nigrodho, catuvassamhi bhātarō, chavassamhi pabbajito Mahindo Asokatrājo* (VII.3.)」と「*ṭṭi*」節は、Eggermont が主張しているように「(王の治世) 第三年にニグロード(が出家し)、第四年に(王の)兄弟(が出家し)、第六年にアシヨカの子マヒンダが出家した」と訳すべきであり、既に「島史」の編纂時代に「王弟教化」の物語はセイロンに知られていたことがわかる。「大史」では、王弟ティッサの出家はアシヨカ王の第四年のこととされており(VI.17)、「島史」の記事と一致する。

セイロンの史書に登場する王弟ティッサが、同じ史書に述べられている王子マヒンダと同一人物でありえないことはいままでもない。すなわち、王弟をマヒンダの名で呼んだのは玄奘の誤解ということになる。王弟の物語は、南北両伝承に共通なことから推して「アシヨカ王伝説」中の古核に属するものと考えられるが、ここでは玄奘が摩揭陀国条で記す「王弟摩醯因陁羅」がセイロンの開教者とは何ら関係ないことを言うにとどめたい。

(二)、高桑駒吉氏は、玄奘がインド最南端の国「秣羅矩吒」の条で記す王弟所建の伽藍について、同じ箇所<sup>(76)</sup>に記されているアシヨカ所建の塔やこの地におけるブツダの説法の伝説と同様に、後世創作されたものと考えている。私も氏の説に従いたい。玄奘は実際にこの地を訪れたのではないから、この記事はあまり信用できないが、実際にこ<sup>(79)</sup>

うした由来をもつ伽藍が存在していたとしても、その縁起譚はセイロン仏教の影響のもとに成立したのであろう。セイロンの仏僧が自国の対岸のこの地で活躍したことは十分に想像できる。

(三)、最後に僧伽羅国条に記される王弟摩醯因陀羅によるセイロン開教の伝説について検討しよう。マヒンダという人物がセイロンの開教者であることは、玄奘より二―三世紀以前に編纂された「大史」や「島史」に明示されている。四世紀後半からは国を挙げての「マヒンダ祭」まで行われており、セイロン仏教徒ならば老若男女を問わずマヒンダ伝説を熟知していたはずである。しかし、セイロン仏教徒はマヒンダをアショーカの「王子」としている。マヒンダを「王弟」とするのは玄奘のみである。私は玄奘が王弟マヒンダの伝説を記すに至った過程を次のように考えている。

セイロンの僧は、はやくよりインド本土で活躍している。玄奘の時代にもマガダ地方には多数のセイロン僧が滞在していた。<sup>(81)</sup>玄奘が彼らと接する機会は多かつたはずである。玄奘はまた南インドの地でセイロン僧と親しく交際し、仏教の教義に関して彼らと論を討わせている。<sup>(82)</sup>玄奘はこうした機会に彼らの誇りとする「アショーカの王子マヒンダ」の伝説を繰返し聞いたものと考えられる。北方仏教徒である玄奘にとつて、アショーカの一族でセイロンの開教者となる可能性をもつと思われたのは「アショーカによつて教化され出家した王弟」であつた。こうした事情から、玄奘はセイロンに伝わるアショーカ王子伝説と、北方に伝わる王弟伝説とを混同したのであろう。要するに、王弟マヒンダの伝説は玄奘の誤解から生れたものといえるだろう。

V.A. Smith は、玄奘の伝えるマヒンダ伝説を南伝とは別に伝えられたインド本土（北方仏教）の伝説と考え、



南北両伝にマヒンダが知られていることを根拠にマヒンダは実在人物であると論じている。<sup>(83)</sup>しかし、玄奘の伝えるセイロンの開教者マヒンダの伝説は南伝から採用したものと考えられるから、Smithの説は成り立ちえない。

### 九、マヒンダ伝説支持の論拠

マヒンダ伝説支持の論拠は次の八項目にまとめられる。<sup>(84)</sup>

- (1) Majhima 等の遺骨発見によるアシヨーカーカ王の伝道師派遣の一般的歴史性。
- (2) アシヨーカーカ王文字と酷似した書体のセイロン仏教刻文の存在。
- (3) アシヨーカーカ王法勅（摩崖法勅第十三章）に見られる暗示。
- (4) 西域記卷十一にある摩醯因陁羅の僧伽羅國への正法流布の記述。
- (5) マヒンダ渡来後まもなくその妹のサンガミッター尼がブツダガヤーの菩提樹の枝を携えてセイロンに移植したとの伝説も、サンチータ東門の彫刻中にその確証が見出されること。
- (6) セイロンの洞穴には、マヒンダによつてもたらされたとされる古いパーリのアルファベットで書かれた刻銘が残されていること。
- (7) 当時インド大陸からセイロンへ渡るに必要な航海術が十分に発達していたこと。
- (8) セイロンは当時既に相当程度の文化を有し、仏教に関する知識もあり、受容態勢が整えられていた。そこへ正式に仏教が移入されたと考えられること。

(2)(3)(6)(7)(8)は、仏教がマウリヤ朝の前後の時代にセイロンへ伝えられた事実を証しているものであり、アシヨーカ  
の王子マヒンダが実在人物であることを積極的に立証するものではない。また玄奘の記録がセイロン伝説の変形で  
あり、(4)がマヒンダ伝説支持の論拠とならないことは既に述べた通りである。(5)でいうサンチーの塔門の彫刻  
は、A. Grünwedel によつてサンガミッターのセイロン来島と同時に行われた菩提樹来島の伝説を彫つたものと解  
釈され、W. Geiger や Rhys Davids もこの解釈に従つたのであるが、A. Foucher がこれをアシヨーカによる菩  
提樹供養の物語と解釈して以来、前説を支持する学者はほとんどなくなつてゐる。(93)アシヨーカによる菩提樹供養の  
物語は、南方仏教徒にも伝えられたが、特に北方仏教徒の間でアシヨーカ王伝説の重要部分を占める挿話として広  
く知られてゐた。(97)アシヨーカ王の刻文からも、王が実際に菩提樹へ巡礼したことがわかる。(88)従つて、この彫刻とマ  
ヒンダ伝説とは無関係である。最後に、(1)の論拠はセイロンの史書に記されている第三結集・伝導師派遣の事件と  
直接関係するものである。これらの問題を論ずるに十分な紙数を持たないため、詳しい説明は別稿に譲るが、こ  
こでは「第三結集」と「諸方の教化」の記事は、地方的・部派的な教団内の事件を粉飾拡大することによつて成立し  
たものであると考える私の立場を挙げるにとどめたい。E. Hrawaller は、サンチーヤソナーリから遺骨を発見  
された Majjhima 等の布教僧を、これらの遺跡の所在地 Vedisa 地方でのみ特に名を知られた布教僧であると考え  
ている。(89)私もこの見解に従いたい。Vedisa を含む西インドの仏教とセイロン仏教との関係は既に論じた。この地  
方から直接仏教を移入した過程を通じて、セイロンの仏僧の間に Majjhima 等の名が伝えられたのであろう。セイ  
ロンの伝説作者が、自派の祖 Moggaliputta-tissa に伝導師派遣者としての名誉を与え、セイロンの仏教が直接マガ

だから伝えられたことを証する目的から「諸方の教化」の伝説を創作したとき、西北インド・南インドの開教者として全インド的に知られていた Majjhantika や Mahadeva などと並べて、西インドで名高かつた Majjhima の伝説が採用されたのであろう。E. Lanotte はアシキカ<sup>(87)</sup>の改宗によつて仏教伝道に非常な便宜が与えられ、仏教はこの時代に急速に全インドに伝播し受容されたことは認めるが、マウリヤ朝時代のこの仏教の発展を特定の部派による計画的な布教の結果とみることに反対し、インドに広く仏教が受容されたのは、ブッダ生存時代にはじまりその後数世紀にわたつて続けられた地道な布教活動の結果であり、地方によつて布教の年代もまちまちであつたと考へている。更に Lanotte は、セイロン史書はこのような史実を極度に単純化し変質させて、インド全域に仏教が伝達した年を仏滅後二三六年とし、その名譽を Moggaliputta-tissa と彼によつて派遣された少数の伝道師に帰しているのであるが、ここにセイロン史書の偏向をみるができると論じている。<sup>(88)</sup>この Lanotte の意見は、きわめて當を得たものと言えよう。

以上の諸論拠からは、単に仏教がマウリヤ期の前後にセイロンへ伝えられたことが立証されるだけであり、マヒンダ伝説を分析することによつて生じた諸々の疑問が解決されたことにはならない。なお、マヒンダが空中より降下したと伝えられる Missaka 山 (Mihintale) に残された後一世紀ごろの碑文に、マヒンダと彼に同行した長老の名が見出されるらしいが、<sup>(89)</sup>これによつて、アシキカより約三世紀の後に、マヒンダ伝説がある程度形を整へていたことを推測することができる。

## 十、マヒンダ伝説の成立過程

マヒンダ伝説は仏教發達の歴史全体との関連において理解されねばならない。本稿の最後にあたつて、こうした点に留意しながら私なりにマヒンダ伝説の成立過程を推論してみようと思う。次に示す仮説には本稿で直接問題としなかつた内容も含まれているが、こうした点については別の機会に論ずるつもりである。

仏教はマウリヤ朝の前後の時代の主として西インドを経由してセイロンに伝えられた。この時代にセイロンへ渡來し布教に従事した西インド出身の僧マヒンダは、後世セイロン最古の僧院 Mahavihara (大精舎) の祖として仰がれるに至つた。セイロンの僧たちが自国の仏教や自派の教理を權威づけるためにとつた方法は次のようなものであつた。(1)ブツダの教えをそのまま受継いだ正統派であると主張すること、(2)ブツダあるいは仏教發生地マガダと直接の關係を求めること、(3)自国の王家や仏教上の重要人物が高貴な生れであると主張すること。このような意圖から西インドの仏教は無視され、第三結集・伝導師派遣といつた一連の伝説が今日の形をとるようになり、マヒンダ伝説がインド本土から伝わつた「アシヨーカー王伝説」中に挿入された。すなわち、マヒンダはマガダの聖王アシヨーカーが西インドの太守であつた時にもうけた子(弟とするのは文藝の誤解)とされ、第三結集で正統と認められた教義を仏教發生地から直接セイロンに伝えた開教者とされた。またブツダにまで遡る師資相承の系譜が創案され、マヒンダはその最後に加えられた。マヒンダの出家具足戒の儀式に西北インドの開教者として名高い Majjhantika と、南インドで著名であつた Mahadeva が参加させられているのも(両者の立場がセイロン上座部と異なるにもか

かわらず)、マヒンダに全インド的な権威を与える目的からであろう。「Samantapāsādikā」や「大史」になると、師の Moggaliputta-tissa が一時隠退したためその間出家後数年にすぎないマヒンダが全インド教団の長となつたという挿話までも加えられている。更に十―十一世紀までには、マヒンダは父母双方からブツダと同じシヤカ族の血を引くと主張されるに至つた。サンガミッターの伝説もこれと全く同じくして成立したものと考えられる。すなわち、古くから Mahāvihāra 系の比丘尼教団の祖として尊ばれてきたサンガミッターは、マヒンダ伝説の成立とともにアショーカの王女でマヒンダの妹としての地位を与えられたのである。

セイロン王とアショーカとの間に使節の交換が行われたことは史実である。アショーカの詔勅をそのまま信ずるならば、王は使節を送つてセイロンを含む隣接の国々に自己の政治理想ダルマを伝えしめ、それぞれの地に人畜の療病院を建てさせ、薬草や樹木を輸送栽培させ、井泉の施設を造らせている。アショーカのこうした外交政策は、長くセイロン人の記憶するところとなつたにちがいない。しかし、アショーカ詔勅にみられる使節 (Duta) の派遣とセイロン史書の伝える伝導師派遣の事件とは全く次元を異にしたものであり、前者が後者の歴史性を証明するという関係にあるのではない。セイロンの史書においても、アショーカ王の使節派遣と教団の長 Moggaliputta-tissa の指導下に行われた伝導師派遣とは、相互に独立した事件として語られている。アショーカの外交政策がセイロンにおける布教活動に益したことは十分に考えられるが、布教活動そのものは仏教教団(決して中央集権化した組織ではない)独自の立場から行われたと考えるべきであろう。

開教者マヒンダに対する土着の王 Devānampiya-tissa の地位も高められ、シヤカ族の血を引く高貴な家柄であ

り、アシヨーカとは「未だ逢わざる親友」であるとされた。マヒンダと Devanampiya-tissa の周囲に、セイロンにおける比丘教団・比丘尼教団の成立、Mahavihara (大精舎)・Cetiya-pabbata-vihara (チエーティーヤ山精舎)・Thuparama (塔園) をはじめとする数々の寺院や塔の建立、仏骨・菩提樹の渡来など、セイロン仏教史上の大事件が集中させられた。Mahavihara には、セイロンの古寺・旧跡に伝わる縁起譚や、セイロン王統史などの伝承が蒐集され、古シンハリ語で書かれた註釈の形で存在していた。最も古い形のマヒンダ伝説を伝える「島史」は、こうした資料をもとにパーリ語でセイロン仏教史を著わした最初の作品であろう。

本稿のはじめで、私はインド周辺の仏教繁栄地にそれぞれ異つたアシヨーカの王子・王女に関する伝説が伝えられていることに注目した。また、これらの伝説が仏教発生地マガダの聖王アシヨーカと自国とを結びつける意図から創作されたものであろうと述べておいた。マヒンダ伝説は「アシヨーカ王伝説」の一部を構成するこれら王子・王女伝説と同列に置かれるべきであろう。マヒンダ伝説の持つ重要性は、聖王アシヨーカの王子がセイロンに布教をしたという事件にあるのではなく、同伝説にマウリヤ朝前後の時代における仏教の伝播の一方向が示されているという点にあるのではなからうか。

(東洋文庫 研究生)

註

(1) 摩崖詔勅第四章(ギルナル文)。その他摩崖詔勅第  
五・六・十三章、カリンガ別刻詔勅第一・二章、石柱詔  
勅第七章等。

(2) カリンガ別刻詔勅第一・二章、小摩崖詔勅(マイソール文)。これらの詔勅中の kumāra(kumāra), ayaputa (ayaputa) の解釈については諸説あるが、ここでは通説に従い共に「王子」の意味にとつた。

- (30) マンマシアン・ニーム・ローサシ石柱の彫刻に關する記  
勅。
- (4) 「區青王経」卷三「區青王経」卷三「雜國合經」  
卷二十三「Dīvyāvadāna」XXVII「阿育王十法益經」  
田因緣經「ターラナータ」「印度仏教史」がオシヤナナ教  
ヤシムマナー教の文獻(Parisīśāparvan IX, Purāna)  
がオシムナーの王に於ての王の各を著する。西十  
ハシムマナーの王の各を著する。西十  
顯正(轉化國條)「大唐西域記」(卷三「田又始羅國  
條」)J. Przyluski: La légende de l'empereur Açoka,  
Paris, 1923, pp. 106-109. J. Marshall: Taxila,  
Vol. I, Cambridge, 1951, pp. 348-351.
- (40) F. W. Thomas: Tibetan Literary Texts and  
Documents concerning Chinese Turkestan, Part  
I, London, 1935, pp. 97-103. 井本婉雅「十國國史」。
- (50) A. Stein (tr.): Kālaṅga's Rājatarāṅgini, Vol.  
I, Westminster, 1900, pp. 21-28 [I. 108-152].
- (7) S. Lévi: Le Nepal, Paris, 1905-8, Vol. II, pp.  
24, 82-83. D. Wright: History of Nepal, London,  
1877, pp. 110-111.
- (80) 「南詔野史」(雲南圖書館版本) 十一、五、一、四、十  
三。
- (60) J. Przyluski, op. cit., pp. 106-109.
- (9) 44' Viṣṇu Purāna 2 Bhāgavata Purāna 2  
Suyasas 2 マシムナーの後継者として著す。その  
彼をマシムナーの王とみた場合、他の Purāna の國  
條から Kunāla の別名を考へられたる (F. E. Pargiter:  
The Purāna Text of the Dynasties of the Kali  
Age, Oxford University Press, 1913, p. 28. H.  
Raychaudhuri: Political History of Ancient India,  
6th ed., Calcutta, 1953, p. 350)。また、公典ヤシ  
ムナー文獻のマシムナーの後継者としての Samprati マシ  
ムナーの王の各を著する (「區青王経」卷三「Pari-  
śāparvan IX」)。
- (11) H. Oldenberg (ed. and tr.): The Dipavaṃsa,  
London, 1879. 平松友嗣「大王統史」(南伝藏「第六  
十卷所収」)。
- (21) W. Geiger (ed.): The Mahāvamsa, PTS, Lon-  
don, 1908. W. Geiger (tr.): The Mahāvamsa,  
PTS, 1912. 大花後道胤「大王統史」(南伝藏「第六十卷  
所収」)。
- (31) H. Oldenberg, op. cit., pp. 8-9.
- (41) P. H. L. Eggermont: The Chronology of the  
Reign of Aśoka Moriya, Leiden, 1956, pp. 59-60.

- (19) W. Geiger: *The Dipavamsa and Mahāvamsa*, Colombo, 1908, pp. 66-68. P. H. L. Eggermont, op. cit., p. 5.
- (19) H. Oldenberg, op. cit., pp. 1-8. W. Geiger: *Dipavamsa and Mahāvamsa*, p. 43 ff.
- (17) Geiger のはじめ「島史」とは別のものと考えたが、後に「島史」を指すと改めた (*Mahāvamsa tr.*, p. xi)。
- (19) W. Geiger: *Mahāvamsa* (tr.), pp. xi-xii.
- (19) W. Geiger, *ibid.*, pp. x-xii.
- (20) J. Takakusu etc. (ed.): *Samantapāsādikā*, Vol. I, PTS, 1924, pp. 1-105. 長井真琴訳「善戒律藏 婆沙(序文)」(南伝蔵、第六十五巻所収)。
- (21) W. Geiger: *Mahāvamsa* (tr.), p. xi.
- (22) 大正蔵、第二十四巻所収。
- (23) 宇井伯寿「印度哲学研究」第一、十四頁以下。
- (24) 摩崖詔勅第一・第十三章。
- (25) *Epigraphia Zeylanica*, Vol. I (1904~12), p. 12 ff., 139 ff.
- (26) *Epigraphia Indica*, Vol. X (1910), p. 96. 中村元「マウリヤ王朝時代における仏教の社会的基礎」(宮本遷厩論集 二〇四頁)。
- (27) アシローカの時代以前に仏教がセイロンに伝わっていたか否かについては、現存する史料からは確実にはわからぬ。しかし、北インドからの移住者・貿易商人・船乗りなどによつて、組織的ではなかつたせよ仏教は既に伝えられていたと考える学者もある。また仏教以外のバラモン教・シャイナ教・アーシューヴィカ教などが、既にセイロンに伝わつてゐたこと、セイロンのアーリヤ系の支配者は仏教伝来以前に相当高度な文化をもつてゐたことなどを推測する学者も多い。G. P. Malalasekera: *The Pali Literature of Ceylon*, London, 1928, pp. 13-20. W. Geiger: *Mahāvamsa tr.*, pp. xviii-xix. H. W. Codrington: *A Short History of Ceylon*, London, 1947, p. 13. W. Rahula: *History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1956, pp. 43-47. S. Paranavitana (*History of Ceylon*, University of Ceylon, Vol. I, Pt. I, Colombo, 1959, pp. 135-137.) (28) 「大史」では第五、十一、二十章にバレンヌ関係の記述がみられる。
- (28) 「大史」(XIII.3-7) では、バロンヌは *Vedisa* と稱する以前 *Dakshināgiri* の地をシマ月間遊したものと見てゐる。W. Geiger はこの *Dakshināgiri* を *Ujjeni* の精舎と考え、この *Mahāvamsa tr.*, p. 88, note 2)。E. Lamotte も Geiger と同様で考え、バロン



- ンダは西インド (Ujjeni と Vedisa) を七ヶ月間滞在したと言う (Histoire du Bouddhisme Indien, Louvain, 1958, p. 321, 338)。しかし、地理上の位置からして Pataliputta-Ujjeni-Vedisa という順序は不合理であり、また Dakkhināgiri を Ujjeni と求める論拠も曖昧である。一方、Malasekera は Dakkhināgiri を Ujjeni を中心都市とし Vedisa を含んだ西インドの県 (Janapada) 名とみづから (Dictionary of Pali-Prper Names, Vol. I, p. 1049)。
- (30) Epigraphia Zeylanica, Vol. I (1904~1912), pp. 12-13, 139-140.
- (31) 水野弘元「ペーリ語文法」二〇—二二六頁、前田恵孝「原始仏教聖典の成立史研究」二五一—五三頁。
- (32) 水野弘元「初期仏教の印度における流通分布について」(「仏教研究」七—四、一九一—二四頁)、前田恵孝「前掲書」一一八—一三〇頁。
- (33) 水野弘元「前掲論文」九〇頁、前田恵孝「前掲書」一一九頁。
- (24) E. Lamotte: Histoire du Bouddhisme Indien, p. 325.
- (35) 平川彰「律蔵の研究」六八四—六九二頁、前田恵孝「前掲書」一一〇—一二六頁、金倉田照「インド中世精

- 神史(中)二二七一—二四三頁。
- (36) 水野弘元「前掲論文」八六一—八七頁。
- (37) B. C. Law: Ujjayini in Ancient India, Gwalior, 1944, p. 9. 中村元「マウリヤ王朝時代における仏教の社会的基盤」(「宮本論集」二〇—三頁)。
- (38) 前田恵孝「前掲書」一五〇—一五四頁。
- (39) Vedisa はガンジス流域と西インドの中心 Ujjeni とを結ぶ交通路上であり、古くから聖地として知られた。サーンチーの遺跡は Ujjeni であり、マウリヤがサーンチーの途次に滞在したマウリヤ山精舎 (Vedisagiri-vihāra) は Ujjeni と比定された (J. Marshall and A. Foucher: The Monuments of Sāncī, Calcutta, 1944, Vol. I, pp. 14-15)。なお、碑文の調査から Ujjeni の地が Ujjeni と密接に関連していったことがわかる (註37参照)。
- (40) Dipavamsa Vīs, Mahāvamsa XIII:.
- (41) 「阿育王伝」「雜阿含經」は沙陀国「阿育王経」は扶南国とす。Khasa はガミンニ南西の地と考えらる (E. Lamotte, op. cit., p. 244. R. Thapar: Aśoka and the Decline of the Mauryas, Oxford University Press, 1961, p. 130)。なお、E. Burnouf: Introduction à l'Histoire du Bouddhisme Indien, Paris,

- 1876, p. 323 note 1 参照。
- (42) 「阿育王伝」巻一(大正蔵五〇、一〇〇頁)、「阿育王経」巻一(大正蔵五〇、一三三頁)、「雜阿含経」巻一十三(大正蔵二、一六二—一六三頁)、「*Divyāvadāna*」(Cowell and Neil ed., pp. 371~372.) 寺本婉雅記「マラーナータ印度仏教史」四五頁。寺本は *Khasya* 国(錫鉄耶国)をマッサムに比定している。
- (43) 註2参照。
- (44) J. Przyłuski, op. cit., pp. 110~111.
- (45) Gujarat の古名 *Lata* と比定される。「大唐西域記」巻十一にみえる(南北)羅羅国がこれである。*Lata* を西シムガルの *Rādha* と比定する説があるが (Indian Historical Quarterly, IX (1933), pp. 744~745) 一般には認められていない。
- (46) 現在の *Sopara*。古代より西インドにおける主要な商港。アシールカ王の摩崖詔勅断片の発見地でもある。高桑駒吉「大唐西域記に記せる東南印度諸国の研究」三二—三三七頁参照。
- (47) 現在の *Broach*。ギリシア名 *Barygaza*。西インドにおける古代の最重要港。高桑「前掲書」三二七—三三一頁、村川堅太郎訳「エリョトラー海案内記」一〇七—一一四頁。
- (48) 一般には *Bengal* と比定しているが、*S. Paravianana* は、本来西北インドの地名であったものが後世同名である東インドの *Bengal* と混同され、結局西北インドの *Vaniga* は消れ去られたのであろうと主張する (*History of Ceylon*, Vol. I-1, University of Ceylon, 1959, p. 89)。
- (49) ヴィンジャヤの曾祖母である *Kalinga* の王女は *Vaniga* 王と結婚したが、二人の間に生れた王女は、*Vaniga* より *Magadha* に赴く途中 *Lata* 国で獅子に襲われて了る (*Mahāvamsa* VI, 5)。
- (50) *Mahāvamsa* VI, 6.
- (51) *Indian Historical Quarterly*, Vol. II (1926), pp. 6-7.
- (52) 高桑駒吉「前掲書」三四三頁。西インドからセイロン島へ至る道は二通りあった。第一は陸路南インドに向い、半島南端からセイロンに渡るものであり、第二は西インドの海港 (*Bharukaccha* や *Supāraka*) に出て、そこから海路セイロンに渡る道である。伝説によるとマヘンダは空中を飛行してセイロンに至ったとされているが、多くの学者の推測するようた、マヘンダ伝説を一応認めた場合マヘンダは第二の道をとつたと考えるのが自然であろう。高桑駒吉「前掲書」三二五—三四三頁参照。

な高桑は、マロニヌが Pāṭaliputta からサンス河川の Tamalitti を経てセイロンに來たという史料のあることを記している(前掲書一〇頁、三四一—三四三頁)。しかし、氏の引用する「Vinaya-Pitakam, Vol. III, ed. by Oldenberg, 1881, p. 338 (Samantapāsādikā)」は、マロニヌ來島を述べた部分ではなく、引用者の誤読と思われる。「Samantapāsādikā」のこの箇所では、菩提樹と長老尼サンガミッターを招來するために、セイロン王の甥 Ariṭṭha がマガダ・セイロン間を往復する事件が述べられている。この箇所について若干考察してみた。

Pāṭaliputta と向いた Ariṭṭha が「海史」による Vinjha の山林 (Vinjhatavi) を越えて Pāṭaliputta に到着し (XV 章)、帰路を三王國と Vinjha の山林を過ちて海辺を達している (XVI<sup>2</sup>)。この Vinjhatavi を Vindhya 山脈と考えたと、Ariṭṭha は四ヘンヌの海岸に上陸後 Vindhya 山脈を越え(おそくへ Ujjeni と Vedisa を経つ) Pāṭaliputta に至る道を往復したと思われ。一方、「Samantapāsādikā」と「大史」では、Ariṭṭha の一行は帰路カメシム川を船で下り、Vinjha の山林を越え、七日後にヘンヌ川湾頭の Tamalitti に到着している(南伝藏本十五卷、一一九頁。Mahāvamsa

マロニヌ伝説考 山崎

XIX-6)。また、マロニヌの來島の直前にマシヨウカがセイロンに派遣した使節の出発地は「鳥史」では不明であるが (XI 章<sup>38</sup>)、「大史」では Tamalitti と明示されている (XI<sup>38</sup>)。要するに、東ヘンヌの大港 Tamalitti は「Samantapāsādikā」「大史」においてヘンヌ・セイロン間の交通上の要地とされているが、「鳥史」にはそのような記事は見当らないのである。Tamalitti 經由の交渉が活発に行われていた時代のセイロン仏僧の地理上の知識を反映して、古伝承が改変されたのではなからうか。

(32) E. Frawallner: The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature, Rome, 1956, p. 18, 186-189.

(34) 「大史」の註釈書。著者の名は不明。本書の校訂者 G. P. Malasekera は「成立年代を八—九世紀または七—八世紀と考えている (Vamsathappakāsini, PTS, 1935, Vol. I, pp. civ-cxi. Pali Literature of Ceylon, pp. 142-145)。なお、校訂 W. Geiger は A. D. 1000-1250 の成立年代を (The Dipavamsa and Mahāvamsa, pp. 32-34. Mahāvamsa tr., p. xi)。

(35) S. A. Strong (ed.): The Mahābodhi-vamsa, PTS, 1891. 作者は Upatissa と伝えられる。菩提樹のセイロン島移植物語を主として扱った作品。成立は十—

- 十一世紀。Geiger は本書を「Mahāvamsa-Tika」なり成文が早くと考へたが Malalasekera は Geiger の説を反論して云ふ (W. Geiger: 'The Dipavamsa and Mahāvamsa, pp. 78-79. G. P. Malalasekera: Vamsathappakāsini, pp. cvi-cvii. ditto: Palli Literature of Ceylon, pp. 142-145, 256)。
- (95) W. Geiger, Mahāvamsa tr., pp. x-xi.
- (97) 例へば、十世紀前半の Lāmāni Mihind (64) の Mahinda IV) の寄進文に次の一節がみられる。「…… Lāmāni Mihind, the incomparable ornament of the Sāhā (Śākya) race; who is the son of Uda Mahayā (Udaya II) descended from the lineage of king Padu Abhā (Pandukābhaya) who [in his turn] was descended from the family of the solar race in the island of Ceylon……」(E. Z., Vol. III, Pt. 4 (1931), p. 224)
- (98) 「Mahābodhivamsa」(p. 116) のこの伝承を載せつゝの。なお「Samantapāsādikā」では沙弥メーナはサンカミッターの子とされてゐるが、優婆塞ナンピヤカは「島史」「大史」と異り、最初から(首都の)Asokārāma から)マレンダの一行に参加してゐる(南伝蔵、第六十五卷、八八頁)。
- (99) Vamsathappakāsini, Vol. I, pp. 180-186. なが「Mahābodhivamsa」(p. 98) のこの伝説を簡単に載せつゝの。
- (99) Vamsathappakāsini, Vol. I, p. 189. Mahābodhivamsa, p. 98.
- (10) Mahābodhivamsa, pp. 98-99, 116.
- (92) P. H. L. Eggermont, op. cit., pp. 4-60.
- (93) 「從無臘乃至九臘、是名下座。從十臘至十九臘、是名中座。從二十臘至四十九臘、是名上座。過五十臘已上、國王長者出家人所重、是名耆旧長宿」(毘尼母經)卷六、大正蔵第二十四卷、八三五頁)。
- (64) 「律蔵」大品六(南伝蔵、第三卷、一〇一一一〇五頁)、「佐藤密雄」原始仏教教団の研究」一三三一一三三三頁。
- (95) 「律蔵」比丘尼分別、波逸提六三三七五(南伝蔵、第二卷、五一三一一五三三頁)、「佐藤密雄」原始仏教教団の研究」一三三三一一三三八頁。
- (96) Dipavamsa XVII<sub>4-5</sub>, Mahāvamsa XX<sub>31-32</sub>.
- (97) アシエーカの王子マヒンダの名は、「経律異相」卷六・十六、「玄心音義」卷十六、「慧林音義」卷七十八等にもみられるが、これらは「善見律毘婆沙」によつた記述にすぎない。

- (68) E. Lamotte, *op. cit.* p. 326.
- (69) 大正蔵、第二十五卷、三七頁。
- (70) 同、四八頁。
- (71) 「阿育王伝」巻四、「阿育王経」巻七、「根本説一切有部毘奈耶雜事」巻四十、「付法蔵因縁伝」巻一、その他。
- (72) 望月「仏教大辞典」5。
- (73) 寺本婉雅訳「タラナータ印度仏教史」七六頁。なお、南方伝承でも「歴代三宝紀」巻十一所収の「善見律毘婆沙」条は目建連子帝子 (Moggaliputta-tissa) —— 旃陀跋闍 (Candavajji) とする師資相承の系譜を載せ、マヒンダを無視している (大正蔵、第四十九卷、九五頁)。
- (74) 「分別功德論」(巻三) は修伽妬略、「阿育王伝」(巻一) は宿大多、「阿育王経」(巻三) は毘多輪河、「Diyāvādāna」(XXVIII) は Vāsoka となす。
- (75) Mahāvamsa V. 54-72. 「善見律毘婆沙」(南伝蔵、卷六十五、六九—七二頁)。
- (76) A. Barreau: *Les Premières Conciles Bouddhiques*, Paris, 1955, pp. 120-125.
- (77) Oldenberg は「When (Asoka) had completed three years, (the story of) Nigrodha (happened), after the fourth year (he put his) brothers (to death), after his sixth year Mahinda, the son of Asoka, received the Pabbajja ordination」と訳し、我国の平松氏もこの訳に従っている (南伝蔵、第六十卷、五五頁)。しかし、王が兄弟を殺害したのは即位灌頂以前の事件であり (Dipavamsa VI. 1-22) 内容的に「治世四年に兄弟を殺した」とするのはおかしい。兄弟を複雑形で示したのは、Eggermont が言うように王弟ティッサと一緒に甥の Aggibrahma (サンガミッターの夫) が出家したことを意味するのであらう (Eggermont, *op. cit.*, pp. 19-21.)。
- (78) 高桑駒吉「前掲書」三四三頁。
- (79) 高桑駒吉「前掲書」三九五頁、足立喜六「大唐西域記の研究」下、八四〇—八四一頁。
- (80) Cūlavamsa, XXXVII. 69. W. Rahula, *op. cit.*, p. 282.
- (81) 玄奘はマヒンダガヤの菩提樹の近くに於る摩訶菩提僧伽藍 (Mahābodhi-saṅghārāma) の由来を説明したので、「此伽藍多執師國僧」と記している (巻八、摩揭陁國上)。
- この僧院は、マヒンダ朝の Samudragupta (ca. 352-376) の時代にローレン王 Śīri-Meghavāna (ca. 352-379) が、セイロンに巡礼僧や学僧のために建てたものである (「法苑珠林」巻二十九、大正蔵、第五十三卷、五〇二頁)。

(82) 「慈恩伝」巻四(大正蔵、第五十巻、二四一—二四二頁)。

- (83) V. A. Smith: *Asoka*, 3rd ed., Oxford, 1914, pp. 186-187. Smith は「玄奘の記す「王弟」伝説がマシメーカの王都のあつたマガダ地方に伝わる真の伝説であると考へ、セイロンでマヘンダを「王子」とするのには後世の改変であると主張する。本文に記した理由であり、私はこの説に従うわけにはいかなう。また Smith は「法顯伝」摩竭陀国条の阿育王弟(法顯は王弟の名を伝えないが、玄奘は(1)の箇所を摩醯因施羅と記してゐる)をマヘンダのことと考へてゐる。しかし「釈迦譜」巻三に載せられた「阿育王弟出家造石像記」(内容は「阿育王伝」などにみられる王弟伝説とはほぼ同じであり、王弟の名は善容亦名達駄首祇 *Vīśoka* とされてゐる)の最終部に引用された記事が「法顯伝」大唐西域記のものに近似していることによつて、法顯の記す「王弟」は *Vīśoka* などの名で広く知られた人物であり、北方仏教徒はこの王弟をセイロンの開教者マヘンダと考へてゐないことがわかる(大正蔵、第五十巻、六七頁)。
- (84) 前田惠学「パーリ語の故郷と原始仏教教団の発展」(「東方学」六、一〇三頁、註四)。なお前田氏は「原始仏教聖典の成立史研究」(五九四—五九八頁)において、再

マヘンダ伝説の史実性を論じてゐる。そこに挙げられた諸項目は前記の論文のものとはほぼ同様である。ただ、シメンが朝時代のノッマカヤーの欄楯でみられるセイロン島の寄進銘文を、新たに一項目として挙げつゝゐる。

- (85) A. Foucher: *The Beginnings of Buddhist Art*, London, 1917, pp. 108-109. F. W. Thomas (*The Cambridge History of India*, Vol. I, pp. 500-501). G. C. Mendis (*A Comprehensive History of India*, Vol. II, Calcutta, 1957, p. 609). E. Lamotte: *Histoire du Bouddhisme Indien*, pp. 266-267.
- (86) Mahāvamsa XXI, 6.
- (87) 「阿育王伝」巻一「阿育王経」巻三「雜阿含經」巻三「Divyāvadāna」XXVII.
- (88) 摩崖記勅第十三章の「三菩提を往きぬ (*ayaya sambodhin*) とつゝ語句を「菩提樹を往詣した」とつゝ意味とどつた。D. R. Bhandarkar (*Indian Antiquary*, Vol. XLII (1913), pp. 159-160). P. H. L. Eggermont, *ibid.*, pp. 80-81. R. Thapar: *Asoka and the Decline of the Mauryas*, Oxford University Press, 1961, pp. 160-161.
- (89) E. Frawallner, *op. cit.*, pp. 17-19. Frawallner は伝道師派遣そのものは史実であつたと考へ、マシメー

カの命令で Vedisa から四周の地へ出発したと主張するが、この点までは賛成しかねる。

(9) E. Lamotte, *op. cit.*, pp. 323-339.

(16) S. Paranavitana (*History of Ceylon*, Vol. I-1, p. 132), G. C. Mendis (*A Comprehensive History of India*, Vol. II, p. 608, note 4).